

Title	故森三樹三郎先生の学問 : 学問研究と資料カード
Author(s)	橋本, 高勝
Citation	中国研究集刊. 1994, 14, p. 92-107
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61052
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

故森三樹三郎先生の学問——学問研究と資料カード

橋本高勝

森先生は日本の中国学会の著しい傾向の一つとして次のように述べておられる。「仏教はインドの哲学であるという理由から、あくまでも外国伝来のものとして、これを無視し軽視する傾向が支配的であつた。」
 仏教に触れる場合でも「仏教思想と中国思想との間の有機的な関連を述べるのが少なく、多くは両者を機械的に並列することだけに終わっているように思われる。」

前京都大学文学部教授の故日原利国氏の呼びかけで作られた「碩学の話を聞く会」が昭和五十七（一九八二）年十二月十七日を第一回として、十二回開かれた。森先生のご指摘はその第二回（昭和五十八年五月十四日）の講演、演題「中国思想における超越と内在」のなかで述べられたものである。

但し、それ以前、『中国思想史』（昭和五十三年、レグルス文庫）の「はしがき」には、「従来の中国思想史の概説書のうちで大きな比重を占めていた経学」、「政治思想ないし経済思想」などは「比較的冷淡」に取り扱い、「そのかわりに従来の概説書においてはほとんど見られなかつた中国仏教の思想を採りあげた」とある。この書は先生がさらに以前から常づね考えておられたことを実践されたものである。

先生は講義のあいまや、下校の電車の中、喫茶店などの雑談の中で、実にいろいろな事を話題にされた。例えば、面子とオナー（honour）とはどう違うか、虚無主義と革命とがどうして結びつくのか、曹洞宗（禅宗）がどうしてお稲荷さんと結びつくのか、というようなことである。このような多くの話題が、先生が常

づね考え温められていたテーマのひとつコマひとつコマであったことを、著作や講演原稿などによって知ることが出来る。

先生は昭和の四十年代五十年代に多くの講演をなされ、その都度、準備された多くの原稿を残されている。なかには同じ事柄を繰り返し同じテーマで講演された場合があり別のテーマで講演された場合があるが、それらの原稿は決して同じものではない。必ず新に稿を起したもので、先生ご自身の関心の向うところによつてか、あるいは聴講者層に依じてのことか、いずれであつても新たな展開が見られる。また既に出版された著書にもとづいて講演された場合もあるが、この場合も角度を変えて、またはよりわかり易くかみくだいて話されていて、テーマの意味がいつそう具体化され明確になっている。

それらの原稿の主要なものは次に示す三冊にまとめられて、人文書院から出版され、知るところ一部の聴講者に限られていた先生のご高説が広く一般の読者にも公開されることになった。

『中国文化と日本文化』（昭和六十三年一九八八）

『生と死の思想』（平成二年一九九〇）

『無為自然の思想』（平成四年一九九二）

これら三冊に収録されている講演原稿のテーマは、収録書の列挙順を①②③としてこれらの番号を各テーマに頭書し、講演年月順に示すと、次の通りである。

① 儒教と共産主義（昭和四十六年 一九七一 十月）

① 中国人におけるニヒリズムと政治的関心の共存
（昭和四十七年 一九七二 一月）

① 名と恥の文化（昭和四十七年四月）

① 経と権——原理と現実（昭和四十七年五月）

③ 水の心（昭和四十七年九月）

① 朱子学と陽明学について（昭和四十八年 一九七三 三月）

③ 無為自然（昭和四十八年九月）

② 迷信と生活（昭和四十九年 一九七四 二月）

① 『中庸』の誠と『莊子』の真（昭和四十九年五月）

① 中国の文化と日本の文化（昭和四十九年九月）

② 日本人の人生観（昭和四十九年十月）

③ 老荘の自然の思想（昭和四十九年十一月）

② 仙人の道（昭和五十一年 一九七六 九月）

- ③道家思想と道教（昭和五十一年十一月）
- ②老年と死（昭和五十二年 一九七七 六月）
- ③老荘思想と浄土教（昭和五十二年八月）
- ③中国思想史上における善導の地位（昭和五十三年 一九七八 三月）
- ③神仏の再生（昭和五十三年九月）
- ②「足るを知る」ということ（昭和五十三年十月）
- ②死の象徴としての阿弥陀仏（昭和五十四年 一九七九 十月）
- ②運命と摂理（昭和五十六年 一九八一 五月）
- ③日中両国の仏教の性格の相違（昭和五十六年十月）
- ③中国思想における超越と内在（昭和五十八年 一九八三 八月）
- ③仏教と道教（不明）

森先生は名文家である。しかも講演の名手としてつとに定評があった。それはむろんよく考えられた話の段取り、明晰な論旨によるものである。それは周到な準備と着実な構想との裏うちがあつてはじめて可能なことである。事実、先生はどんな場でのお話しにも几帳面に原稿を準備して臨まれた。それを、われわれは

ここに列挙した講演原稿によつて知ることができる。出版されている三冊の講演集を見よ、平明な語り口ではあるが、いずれも永年の研究・思索に裏うちされたものばかりである。これらの講演集はきつと講演の模範としても参考となり多くの人びとに読まれるものとなるであろう。

森先生はまた名づけの名人である。例えば、これまでの宗教が信仰に重点があつたのに対し、今後あり得べき宗教としてこれに哲学的宗教と名づける、あるいは中国の現実主義の型を「使い分け」方式、日本人の現実主義の型を「のりかえ」方式、と名づける、あるいは孔子を「ぐうたら無神論者」と名づける、などがある。むろんこれらの名づけは文献事実・事象についての深い考察があつてのことである。

講演原稿は言うまでもなく研究論文とは異なる。よつて時に未来を予測する見解も述べられている。例えば、平和を「戦いとる」というような言い方は言葉の矛盾であり思想の矛盾であるとし、自由競争・階級闘争という「争い」を動力とする発展は限界に達していると指摘した上で、

新しい哲学が、ヨーロッパ風の一元的思考の方向からではなく、日本や中国の多元的思考の方向から生まれるであろう。（『中国文化と日本文化』三六頁）

という。また例えば、「脱宗教化ということが世界史的な事実である」ならばという条件の下に、

好むと好まないとに拘らず、世界中が「罪の文化」から「恥の文化」へ移行してゆくものと考えるほ
かはないわけでありませう。（前書六九頁）

とも予測されている。

予測とは未来への動向を推測することであるが、その動向を見定めるには少なくとも二つの支点が必要である。二つの支点があつてはじめてその二点を結ぶ延長線上に方向を定めることができるからである。先生の場合、それは思想史研究によつて得られた歴史認識と、現状についての生活認識との二つの支点である。こうして得られた予測は、直感や占いによる遊戯的予言とは違い、一般の人びとに対する知的サービスである。

大学における研究も全体社会の活動の一部である以

上、社会から断絶し孤立することがゆるされないのは当然であるが、だからといって、世間の耳目を集めることに汲汲とする物知り談義や、寄席の高座よろしく言葉のくすぐり講談では、学問研究をまつまでもないことで、大学人のすることとしてはあまりにもあわれであり、無意味である。

森先生の講演集は永年の研究を広く社会に還元したものである。これを読む人に、とくに問題意識をもつて読む人にはきつと知る喜び、考える樂しみを与える、それは平明で洗練された表現である上に、研究の確かな裏うちがあるからにほかならない。そうであつてこそ大学と社会とをつなぐすぐれたパイプといえる。

それでは、森先生は何を研究しておられたか、それは先生ご自身、完成品として発表され出版された著書・論文によつて知ることができる。どのようにして研究されていたか、これはわれわれに遺された資料カードやノートによつて知ることができよう。

先生のノートは、講義ノートである前に、まず研究ノートであつた。先生の研究のための作業は基本的に

三段階に分けてみるができる。ノート作成はその第二段階の作業であった。まず第一段階として資料カードの作成作業があり、そのカードによつて一段落また一段落と書き継いでノートが作られ、そしてそのノートを踏まえて論文が作成された、ということである。但し、ノートには斜線・交叉線による抹消があり、欄外の書き込みや付箋による補足などがあつて、幾度もの修改の跡を見ることが出来る。おそらくそれらのノートを講義に用いながら熟考を重ねられたことを示すものであろう。

ところで、聞くところによると、パスカルのいわゆる『パンセ』とはもともと未完成の草稿であつて、その草稿には幾重もの修改の跡が見られるという。そういえば、朱熹にも『論語集注』のほかに、『論語精義』と『論語或問』がある。『論語精義』は先学の諸説を収集し精選したものであり、『論語或問』の方は多くの学徒・諸生たちと諸説について交わした議論を収録したものであつて、それぞれ森先生の資料カードやノートに相当する。先生のノートは熟成のための温床であつた。このようにすぐれた論稿は熟成をまっけてはじ

めて生み出されるものようである。

先生は晩年、集中心力がなくなつた、ともらされたことがある。ノートの一部に筆力のない字で書かれているところがあるが、あるいはそのことと関係があるのかもしれない。それを除けば、ノートのほとんどは同じ筆力、同じ筆致で終始一貫している。このことは緩むことのない集中心力が永年にわたつて持ち続けられていたことを示すであらう。この集中心力は資料カードにも見る事ができる。

資料カードは四十数項の項目立てのもとに総数一万八千余枚が作成され、十二のカードボックスに収められている。カードの用紙は大部分が罫線のあるノートをきざんで作った薄手の紙で、その三分の二ほどのは色薄よごれて紙質もよくないもの、三分の一ほどのはよごれも少なく紙質もましなものである。残り一部は右端から一・三cmほど内に朱色の縦線がありそれを三段に区切る横線があつて前の二種よりは形がやや大きく均一のカードである。これは市販のカードであらう。いずれも大項目・小項目・出典を右端に記し、あるい

は出典は本文に頭書し、表裏両面に文献資料を採録し又は表などを記入している。すべてのカードは大体同じ筆致で一貫していて、とくに重要な表現・内容のところでは、○●など白黒の圈点や朱点を傍に打って、目につき易くしてある。このカードを見ると、営々として書き続けられた先生の非凡な精神力、強靱な集中力に、ただ／＼頭がさがる思いである。

先生は次のようなことを言われたことがある。あわてて粗雑になぐり書きするのはかえって時間のロスである。それは、あとで見るとどう書いてあるのかわからなくなつて、文献を調べ直したり書き直したりで、二度三度と手間がかかつてしまう、ということである。その時はなるほど思ひはしたが、今から思うに資料カード作成の経験にもとづくものようである。

資料収集そのカードの作成は、学問研究の基礎作業となるばかりでなく、広く一般にもよくとられている方法である。それには、特定のテーマを立て、それに即応した項目に限定して資料を収集する方法があり、またそのテーマに関連するかなり広い範囲にわたる多くの項目を設けて収集する方法がある。先生の場合、

少なくとも当初のは後者に属する。それは次のような考え方による。

過去の中国文化を支えてきたのは主として士大夫と呼ばれる官吏の身分をもつ知識人であり、中国の思想には政治・道徳への傾斜がきわめて強い。このような中国思想史を跡づける場合、思想の言葉によって表現されたものだけを追っているのでは、思想史そのもの内容が貧弱になつてしまう。

この考え方は例えば、先生の資料カードに、「官制」「軍制」「経済」など、直接に思想の言葉によつて表現されたものでない文献事実をも収集するための項目を立てられているところに、よく示されている。

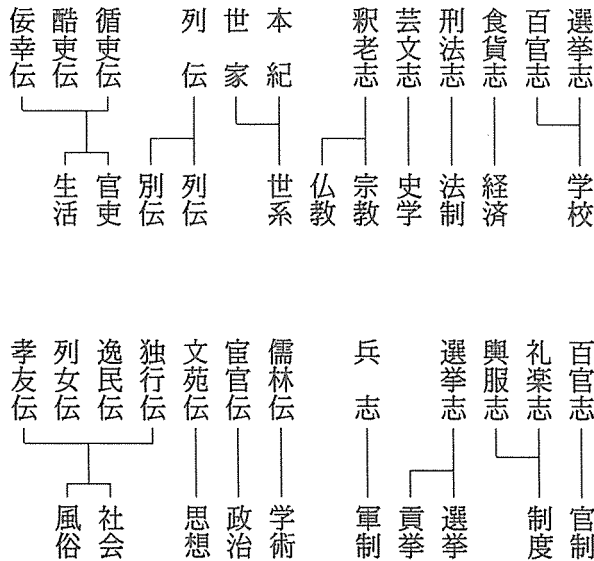
ところで、言うまでもないことであるが、資料カードを作成するには、やみくもに文献を漁つて抜き書きするのでは整理も困難であり、資料としての利用価値も生まれまい。やはり、収集すべき資料内容を示す項目を立て、分けておくことが必要であり、収集にも便利である。そして項目を立てるには、何のために資料を収集するかという目的あるいはテーマをあらかじめ定めてかかる必要がある。

それでは、先生のこの資料カードの場合、どのようにしてテーマを定め、どのようにして項目を立てたのであろうか。もし一通り研究が達成されてから後であれば、その研究対象に即した項目を立てることは容易にできるであろう。しかし、それはもはや筈蹄に類する。初学者はともかく、全く予備知識なしに研究対象を選ぶことはないであろうが、しかし、本格的に研究に入っていない前に、その研究対象に即した項目をあらかじめ立てておくのは容易ではないはずである。

そこで考えられる一つの手段として、もし既になんらかの形で項目立てがなされている前例があれば、それを採用するか、あるいはそれを参考にして立てるべき項目を選定する、ということである。その前例となり得るものとして類書や正史その他の書籍の目次がある。

そこで、改めてこの資料カードに立てられている項目を見ると、どうも正史を参考にしたもののようにである。このことは、採録してある資料の大部分が史記から隋書・唐書に至るまでの諸正史からのものであること、そして諸正史に立てられている分類項目（目次）

と対応すると見られる項目が多いこと、などによって推定することができる。厳密に調査してのことではないが、例えば、



のように対応させて見ることができ、むしろこれは、立てられている項目のもとに収集されている資料が対応する志・伝からのみ採録されているということでは

なく、それらの志・伝が項目立ての参考になつてい
 であろうということである。

さらにまた、この資料カードが六朝思想史の研究の
 ためにまず作成されたことを、われわれは次の点から
 知ることができる。前にこの資料カードの用紙につい
 て触れた。その最も古い用紙のカードには諸正史とく
 に六朝の正史から採録したものが多く、それらのカー
 ドによって作成されたであろうノートも六朝思想史を
 対象にしたもので、部分的に隋唐に及ぶのみである。

この資料カードは元の収蔵状態を示すために、カー
 ドボックス十二本に順にAからLまでのアルファベッ
 ト大文字を付けてある。そのうちBDの二本は他の十
 本とは異なるところがある。まず、最も新しい用紙の、
 市販のカードがBD二本に集中していることである。
 次にAC EFGHJKの八本はほとんどは諸正史から
 採録したものを収め、項目立てには相互に重複するも
 のが多い。ILの二本は主として列伝からの採録であ
 る。以上の十本の項目立ての参考は大体、正史が中心
 である。対してBボックスの項目は、天命・性命・自
 然の三項で、他のボックスの項目と重複しない。Dボ

ックスの項目は宗教一項であつて、この項目は他のボ
 ックスにもあるが、それらの収蔵枚数の合計でも四一
 七枚であり、Dボックスの一三七一枚はその三倍強で
 ある。

宗教については、先生ご自身、「学生のころは実は
 宗教社会学をやつてみたいと思つていたのであります。
 そのため中国思想史を研究しながらも、宗教社会学的
 な関心を持ちつづけていたのであります」（『中国文
 化と日本文化』五頁）と言つておられることと深く関
 連する。

先生は高津中学（現高津高校）から大阪高等学校文
 科乙類に入学された。その乙類とはフランス語選修の
 クラスである。おそらくこのときに始まると思われる
 が、京都帝国大学文学部哲学科に入学すると、フラン
 ス社会学に強い関心をもたれたと聞く。結局、小島祐
 馬教授のもとで支那哲学を専攻された。小島氏はフラ
 ンス留学の経験がある。森先生もフランス留学を強く
 念願していたとのことである。それから文学部副手、
 そして東方文化学院京都研究所（現人文科学研究所）
 の助手として宗教研究室に所属、この間、中国古代の

学校と神話を研究された。やがて大阪高等学校教授となつて間なしに発表されたのが、

支那の神々の官僚的性格（昭和十八年）

であり、これを中心にとめられたのが、

『支那古代神話』（昭和十九年、大雅堂）

である。やがて、敗戦。森先生はそれまでの中国神話の研究が一段落したところで、関心を向けられたのが中国中世思想史であつたと考えられる。資料カードの作成は戦後に始まつたもので、この資料カードを利用してまとめられた初めの論文として、先生が新制で発足した大阪大学の助教時代初期に発表された、

魏晋時代における人間の発見（昭和二十四年）

梁の武——南朝文化の象徴——（昭和二十七年）

六朝士大夫の精神（昭和二十九年）

の三本がある。この三本は六朝時代の思想をかなり幅広い角度からとりあげたもので、六朝思想史研究のいわば三部作である。資料カードの用紙の新旧から、その作成時期を三次に分けてみると、この三部作は第一次第二次の資料カードによつてまとめられたものと考えられる。

続く論文として、

莊子における自力と他力（昭和三十三年）

王充の運命論の持つ歴史的意味

——徳と福の問題——（昭和三十四年）

莊子における性の思想

——養生説と享楽主義との萌芽——（昭和三十四年）

論語「五十而知天命」の両義（昭和三十七年）

などがある。これらは後漢までを時代範囲とする古代思想史の研究である。

とくに、王充の『論衡』に対する先生の評価は、「上古より漢代までに至る性命論の總決算として見られるばかりでなく、次に来たるべき六朝の性命論にも重大な影響を及ぼしている」ということである。してみると、一九六二年（昭和三十七年）に提出された博士論文（昭和四十六年 一九七一 出版）、

『上古より漢代に至る性名観の展開』

はそれまでに既に骨子が完成していたわけである。

先生の宗教社会学的関心の向うところ、まず中国神話の研究をへて、次に老莊思想・仏教思想の隆盛した

中世、とくにその前半である六朝思想史に照準を合わせ、さらに中国思想史上の重大な問題、人生観に向うことになったのである。即ち、相互に密接な関係にある性命観と自然観とである。この二つのテーマは六朝時代に隆盛した『莊子』をはじめとする道家思想を核として立てられたもので、これをBボックスに見ることがができる。

カードボックスのBの一本の資料カードが、他のボックスのとは重複しない天命・性命・自然の三項目に限定されて集中的に収められているのは、それまでの収集方法とは異なり、テーマをしばらくこみ、時代をひろげて新に収集が行われたことを示している。カード用紙が比較的新しく、市販のカードであることもこのことを裏づける。

このBボックスに収める資料カードを主に用いての研究成果が『上古より漢代に至る性命観の展開』であり、そして自然観の展開をたどったところの、

『「無」の思想』（昭和四十四年）

である。この書は、「老莊思想の系譜」という副題があるように、老莊的自然観の系譜をたどったものである

る。そこで、この書にみられる美事な概念分析と資料カードとの関係について、今はただその一端を次に見ることにする。

『「無」の思想』は、「日常の生活で用いている自然や不自然という言葉」、つまり「多義あいまい」な日常語から出発する。そして、自然思想の系譜をたどりながら、文献上においても「多義あいまい」な自然という言葉の意味内容を分析し、より分けて、次の三類型八種に区分している。

- (1) 無因自然 — (1) 無因自然
- (2) 虚無自然
- (3) 無差別自然
- (4) 運命自然
- (5) 理数自然
- (6) 本性自然
- (7) 則天自然
- (8) 練達自然

分類するには、そのための基準（指標）を立てる必要がある。それでは、この書の場合、どのような基準

で分類しているのか。

自然の概念を規定（定義）するに先立って、「自」の本来の意味を問ひ、

いちばん手つとり早いのは、その反対語である「他」という語をおいてみることである。つまり自とは「他ではない」ということである。
 という。これを踏まえて、

他者の力を借りないで、——①
 それ自身に内在する働きによつて、——②
 そうなること（もしくはさうであること）——③
 といひ、これを自然の第一義とする。

自然そのものの定義であれば、②と③の「それ自身に内在する働きによつて、そうなること」というだけで十分であつて、①の「他者の力を借りないで」といふ言葉を加えなくとも、自然の概念は過不足なく言い尽くされているはずである。それではなぜ、それを必要としたのか。

それはこの書では既に「自」の意味として「他ではない」としたところに準備されているのであり、それを、『列子』の張湛注「自然とは、外より資らざるな

り」に合せて、「他者の力を借りない」と言い換えたものであろう。そうであれば、それだけで自然の第一義としてもよいのではないか。しかし、それでは十分でない。そこで、②③のほかに、①を必要としたのは別に考えるところがあつてのことと、考えられる。それはそれに含まれる排除の論理に注目したからである。

自然の第一義に従えば、自然の語は自由という語に訳することもできる。この自由について、「自由にする」（動作）、「自由になる」（結果）、「自由である」（状態）といつてみる。しかし、自由の意味内容は不明のままである。そこで仮に、

何から何によつて何を自由にするか
 何から何によつて 自由になるか
 何から 自由であるか

というように、格助詞（後置詞）を利用して疑問文を作り、それぞれ「何」に具体的な事柄を代入してみるならば、自由の意味内容が明確になつてくるはずである。そのうち、とくに「何から」によつて排除の論理が表現される。例えば、

何から解放して 自由にするか

何から解放されて自由になるか

何から解放されて自由であるか

というように補足すると、よりはつきりする。「何かから解放するか」はまた「何を排除するか」とも言い換えることができる。この場合、何物かを排除するとそれなりの自由があらわれる、ということである。

この書に見られる自然という語の意味区分、分析には実に美事にこのような排除の論理が活用されているのである。その實際例を、見易くするために傍点を付けて、列挙してみよう。

〈2〉老子が最後に到達した境地は、人為が生みだし
た有をすべて否定するばかりでなく、およそ形
ある有を否定しつくした虚無そのものである。
その意味では、これを「虚無自然」とよぶこと
も許されるであろう。(三八頁)

〈3〉もし、われわれが人間という限定された立場か
ら解放され、相対差別という人為から解放され
るならば、そこでは是非・善悪・美醜を越えた
自然の世界があらわれるであろう。この意味で

の自然を「無差別自然」とよぶことにしたい。

(四三頁)

〈4〉自然は人為を排除するばかりでなく、神をも排
除する。(五六頁)ここでは神の摂理がないた
めに、いたるところに不合理が生まれる。この
不合理こそ、運命の本質である。(六四頁)も
し自然と運命とが同義であるとしたら、それは
「人力のはからいをすて、ひたすら運命の流
れのままに身をゆだねること」といいかえられ
よう。(四六頁)

〈5〉天地山川をふくむ自然の特徴の一つは、それが
法則をそなえているということである。そこで、
しばらくこれを「理数自然」とよんでおきたい。
(七一頁)〔古い中国では〕自然界の法則が同
時に人間界の法則なのであるから、数理をきわ
めることは、人間の未来を予知する占いに役立
ったのである。(八五頁)理数の自然は人工か
ら離れて、それ自身に内在する法則にしたがっ
て展開するものであった。(八九頁)

〈6〉心の内にある無意識の働きが、もし作為や人為

でないとするれば、これを無為自然の一種とすることが許されるであろう。ここではこれを本性自然とよぶことにしたい。(九〇頁)本性自然は自己と外物とを差別し対立させる立場にある。

(一一三頁)

以上、〈2〉〈3〉〈4〉〈5〉では、「を否定する」、「を排除する」、「をすてる」や、「から解放される」、「から離れる」等の表現を用い、排除の論理が活用されている。

〈6〉の「作為や人為でない」については、「他ではない」が「他者の力を借りない」と言い換えられているのと同様に、「作為や人為を借りない」と言い換えられよう。つまり、無意識の働きという本性と対立する外物として、作為や人為を排除する、ということである。

〈1〉他の自然思想の持ち主が、「他者」を人為や人工などの特定のものに限ったのに対して、郭象はあくまでも「他者一般」を問題にした。(一五頁)郭象は、自然の第一義を守りぬぎ、物の生成に原因は存在しないという帰結に達し、さ

らにそこから幾つかの特色のある哲学をみちびきだした。この立場を、しばらく「無因自然」とよぶことにしておきたい。(二二頁)

ここには「を」「から」を用いた、排除の論理の表現はないが、代って「原因は存在しない」がある。これは生成因としての、人為を含む「他者一般」を排除するということである。これも無為自然である。

以上の六種の無為自然は、一括して、

(2)自然にとつての他者は、人為であり、人工である。このように人為を対立者として排除する。然が、すなわち無為自然である。(二九頁)

と規定する。この規定は、自然の第一義の①「他者の力を借りないで」を敷衍したものにほかならない。自然に対立するものとして排除される「他者」は、上に見た六種の自然の規定から明らかなように、一樣ではない。一樣でないから、六種に区分するを得たわけである。以上によつて見るに、自然の概念規定としては、②③の「それ自身に内在する働きによつて、そうなること」で十分であるが、しかし、これだけでは、多様な意味内容のそれぞれの自然も自然としては同義であ

るから、区分するなんの手がかりもない。つまり、①の「他者の力を借りないで」はその区分のために必要であり、「他者」はその指標として要請されていたのである。このことを明確に述べているところがある。

「他者の力を借りないで」というが、その他者が具体的に何であるかは、その場その場で異なっている。したがって自然の具体的な内容は、何を他者としておくかによって決定される。他者が変われば、自然の内容もそれにしたがって変わる。自然が多義であるのは、実はこれに対応する他者が動くためである。(一四頁)

「自然の具体的な内容」を y とし、「他者」を x とすれば、 y は x によって決定されるというのであるから、これは y が x の関数であるというのに等しい。言い換えると、自然という言葉を多様な意味内容の面から規定したのに等しい。即ち、仮りに、

- (1) 無因自然 $=f$ (他者一般) $y_{(1)} = f(x_{(1)})$
 (2) 無為自然 $=f$ (他者人為) $y_{(2)} = f(x_{(2)})$
 (2) 虚無自然 $=f$ (他者有) $y_{(2)} = f(x_{(2)})$
 (3) 無差別自然 $=f$ (他者差別) $y_{(3)} = f(x_{(3)})$

<4> 運命自然 $=f$ (他者人力) $y_{(4)} = f(x_{(4)})$
 <5> 理数自然 $=f$ (他者人工) $y_{(5)} = f(x_{(5)})$
 <6> 本質自然 $=f$ (他者外物) $y_{(6)} = f(x_{(6)})$
 と表すことができる。これを一括して、

$$\text{諸因自然} = f(\text{他者}) \quad y = f(x)$$

と、関数的に規定したのに等しい、ということである。 y が x の関数であれば、 x と y との対応は座標上に線として投影できる。「これに対応する他者が動くためである」とはあたかもその線を動くかのように引き出されたのであろうか。それにはまず多くの資料が手元になければならぬであろう。そうであれば、「他者」が「その場その場で異なっている」ことは見易い道理である。そこで次に、「他者が動く」というイメージはどうして生まれるのか。それには資料カードを並べ変えながら、隣り合わせるカードに見える「他者」相互の意味的距りが大きくならないように、並べ方を調節してゆく。こうして並べられたカード上の「他者」の具体的な内容の移り変わりがあたかも凹凸のない緩勾配のごとくになれば、そこに「他者が動く」というイ

メージが生まれるのではなからうか。その結果として、(1)無因自然、(2)無為自然、(3)有為自然というよ
うな、排除する「他者」を特定しないで「他者一般」
とする(1)から、特定する(2)へ、それから人為を含
む(3)へとという順に三類型が分類され、そして同様に
(2)無為自然もさらに細区分されるに至ったと考えら
れる。これを可能にする操作はカードによるのが便利
であることはよく知られているところである。

むろん自然に対立するものとして排除される「他者」
であるかどうか、またそれぞれの資料の「他者」が同
じものと見える場合にそれらを同じものとして同定し
得るかどうか、これらは基本的には資料の読解にかか
ることであるが、カードを並べて比較対照することに
よって読解がより容易になるはずである。このような
読解を一通り終えてはじめて、「その場その場で異な
っている」「他者」によって自然を分類するために、
カード操作に入ることになるのであるが、その分類
は幾何学的な線を切り分けるのとは異なる。自然とい
う言葉の、用いられている場ごとの意味内容は歴史的
な産物であるから、意味的なたよりがあり、ふくら

みなどがあつて、連続線上を移動するがごとくに移り
変つて異なるといふようなものではない。それ故、そ
の思想的な事情を精査してそれぞれの意味的なた
より、ふくらみを把握する必要がある。そうしては
じめて無理に切り分けて分類するのではなく、より分
けて分類することができるようになるはずである。こ
れをこの書に見ることができよう。

この書における、三類型八種の自然の意味区分及び、
その意味分析の美事なことは、一読してわかるほど、
実に平明に説かれているのであるから、以上のことは
贅言でしかない。ここで強調したいのは、歴史的事実
歴史の意味を精査し読解して思想的流れを見きわめ
るのには豊富な資料が必要だ、ということである。

「ない(存在しない)」、あるいは「一つしかない」
というのは、すべてを調べて後でなければ、そうは断
定できない。範囲を限定し、その限りで断定する場合
でも、見落としている危険はある。逆に、「ある(存
在する)」というのは、一つあつても、「ある」と断
定できるが、たまたま一つ拾い出したことをもつて全
体に及ぼすのは危険である。このような危険はいろい

るがあるが、こうした危険を避けるためにも、豊富な資料を準備してかかる必要がある。

森先生は資料カードの偉力を十分に活用された。その最もすぐれた成果の一つとして『「無」の思想』を挙げる事ができる。

この資料カードは、総目次・索引をつけ、

森三樹三郎博士

中国中世研究資料カード集

というタイトルで、朋友書店から販売されていて、一般に公開され広く知られるところとなっている。それは一万八千余枚の資料カードをB4版五九四二枚に複写し、十五冊に分冊製本したもので、初印本は一九八八年（昭和六十三年）から翌年初にかけて、三次に分けてようやくできあがったのである。朋友書店の土江社長から聞くところによると、専門外の方からも、そして海外の方からも注文があり購入していただいたとのことである。

執筆者紹介（執筆順）

田 仲 一 成 金沢大学教授

花 崎 隆 一 郎 大阪商業大学非常勤講師

南 昌 宏 大阪大学助手

橋本高勝 京都産業大学教授

なお、次号は日本中国学会第四十五回大会におけるシンポジウム「儒教と二十一世紀と」の記録を中心とした特集号の予定。